

VI-15

水辺利用施設調査について

建設省岩手工事事務所 ○中村 中

武内 達夫

安陪 和雄

近年、地球規模の環境の保全が叫ばれ、住民の意識もうるおいやゆとりを求める方向に変化しつつある。河川においても流域における都市化や産業活動の進展により、うるおいとやすらぎのある河川環境の整備が求められ、全国的に各種事業が実施されている。北上川においても「北上川水系河川環境管理基本計画」が策定され、今後は本計画に基づき親水性等に配慮した施設の整備が行われることとなる。

ところで、現在の河川環境整備事業はおもに、高水敷の整備とその利用が中心であり、水と親しむことのできる空間としての水面（低水路）の整備やその利用についてはこれまで対象とされておらず、具体的計画はもとより、利用の方針さえも決っていないのが現状である。

このようなことから、盛岡市内を流れる北上川、中津川、雫石川をモデルとし、河川固有の環境資源である水を水空間として捉え、その利用方針の検討を行ったものである。

モデル河川周辺環境調査

河川周辺の環境調査として水理特性、自然特性、景観特性、法規制、整備計画等を調査するとともに、沿川住民に対し水空間の実体、施設の整備像に関するアンケートを行ったもので結果は次のとおりである。

北上川

現況イメージ：流量が多く、広い河原のある川

現況利用：散策、イベント観覧等

将来の整備：散策等を中心に川の景色をたのしめるよう、階段護岸等の整備を望む

中津川

現況イメージ：水がきれい、川と町並みが調和している。

現況利用：水遊び、散策等

将来の整備：散策や親水活動を中心に川とふれあえるせせらぎ水路等の整備を望む。

雫石川

現況イメージ：水がきれい、広い河原がある。

現況利用：散歩、水遊び等

将来の整備：散策をしながら自然観察がたのしめるよう、階段護岸の整備やせせらぎ水路を望む。

また、既存の環境護岸、親水広場、河川公園等を対象として、施設が目的に見合った施設として評価されているか沿川住民のアンケート調査によって考察した結果は次のとおりである。

〔形状〕：表面が緩勾配のもの、水際に曲線を用いて柔らかい感じのものは評価が高く、直線的で固いイメージのものは全般的に評価が低い。

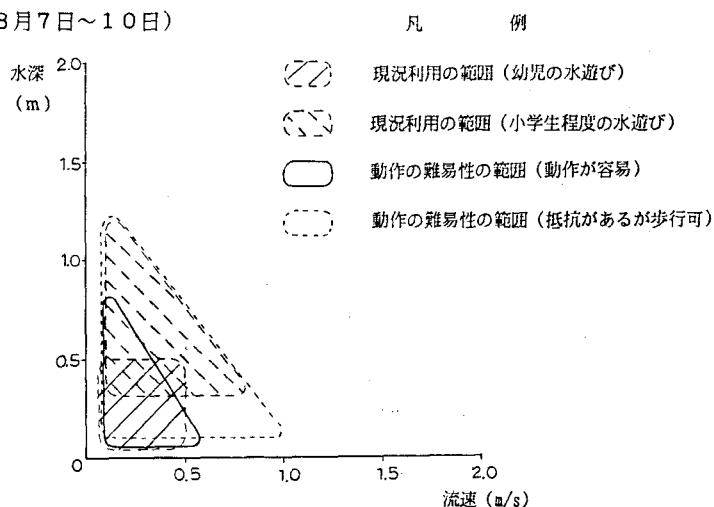
〔素材〕：周辺景観に調和した素材の選定が重要であり、今回の結果では自然石や木杭等を使用したものの評価が高く、周辺に緑のある地域では、張り芝等の植栽を施した事例は評価が高かった。コンクリートそのものによる施設は形状・色等の工夫がなされても全般的に評価は低い。

〔色調〕：自然石、植栽等天然の素材やそれらを模した素材は色調もやわらかく高い評価を得ている。コンクリートそのままの事例は評価が低い。また、コンクリートへのペインティングは賛否両論があった。

モデル河川における利用と水理条件

現地調査日に（平成2年8月7日～10日）

に各河川で行われていた利用実態等から利用内容及び動作の難易性と水理条件との係わりを総合すると次図のようになる。



水空間利用施設整備の方向性

以上の検討結果等から施設整備の方向性は次のように考えられる。

北上川（開運橋～夕顔瀬橋）

- ・低水路での水遊びは、現況の水理特性、河岸形状等から困難であるが、利用実態等からみて、潜在的ニーズはあると考えられ、子供も水遊び利用の可能な空間を低水路沿いに整備する。
- ・カヌー、ボート下り等の水面利用に対応できる水辺へのアクセス性向上をはかる。
- ・区間全線にわたっての整備は河岸形状からみて困難と思われるため、高水数の広がり、アクセス性の優れる右岸側をスポット的に整備を行う。

中津川 A（下の橋～中の橋）

- ・低水路では、水遊び等の多様な利用が可能であり、現況での利用も盛んであることから、現況利用の活動性を損なわない整備を行う。
- ・低水路から緩勾配の親しみやすさのある高水数が連続し、アクセスの良好な右岸側の区間全線について、その利用可能性の保全と活性化を図るものとし、施設の整備は、水深の深い区間等必要最小限度とする。

中津川 B（山賀橋～上流200m）

- ・幼児の低水路での水遊びは、現況の水深、流速からみてやや危険であるが、利用実態からみて潜在的ニーズはあると考えられ、利用可能性の高い左岸を中心に幼児の水遊びの可能な空間を整備する。
- ・左右岸共に、水辺から緩勾配の高水数が連続し、アクセスも良好であることから、区間全線について、その利用可能性の保全と活性化を図るものとし、河岸の侵食のみられる区間を中心に整備を行う。

雲石川（雲石川橋～上流200m）

- ・低水路での水遊びは、現況の水理特性、河岸形状等から困難であり、周辺土地利用等からみてニーズも低いと考えられることから、水面の広がりや連続した流れを活用した釣りや、カヌー等の利用ができる水辺へのアクセス性向上をはかる。
- ・現在高水数が公園的に整備されており、高水数からの利用が多く、且つ容易と考えられる左岸側について整備を行う。
- ・河岸にみられるヤナギ林等、自然的な趣きの濃い河川環境の保全をはかる。